

今まで何度あなたに助けられたでしょう。

辛い時、悲しい時、何度あなたのもとに行つたでしょう。私が落ち込んでいる時、あなたはいつも、そこで待っていてくれた。

腰越の海。そこが私の居場所だった。

私は部活で部長を務めていた。責任感やコロナによる活動制限、なかなか上手くいかない現実にも苦しめられた。気持ちをすっきりさせられる場所、穏やかになれる場所、自分の弱さを吐き出せる場所、そんな場所なんてあるはずないと、感情を無くしかけ外をさまよっていたある日の夕方、見つけたのがあなただった。波の音、清らかな空気、柔らかい砂浜。まるで祖母にそっと抱きしめられているような、そんな温もりをあなたは感じさせてくれたの。私の肩の荷をあなたは少しずつおろしてくれたの。

それからというもの、私はあの時の自分が一番求めていた「温もり」についてよく考え

るようになった。人は、人の心はどうしたら
やさしく、ほっこりあたたかくなれるのだろ
うかと。

私にこれまで安らぎを与えてくれたもの、
目をつぶって考えた時、一番に出てきたのは
家族、そしてご近所さんだった。朝起きれば
家族が「おはよう。」と、家を出ればご近所さ
んが「いつてらっしゃい。」と言ってくれる。
夕方学校から帰れば、ご近所さんが「お帰り
なさい。」と、家に入れば家族が「お帰り」と
言ってくれる。いくら気持ちが涼んでいたと
しても、笑顔でかけてくれるあの一言で、私
は自分には守ってくれる人がいる。だから大
丈夫、と思うことができる。昔からずっと変
わらないこの光景、私が住んでいるこの町の、
この鎌倉の温もり。その温もりを今度は私が
伝えていきたい。ずっと守っていきたい。

ねえ、あの時のあなたが私を導いてくれたか
ら、私は大切なものに気がつけたんだよ。

鎌倉。ここが私のふるさと。